方向　第一八号　一九八二年六月三日発行　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

わたしの兵隊手帳

赤谷明海

〈編集者まえがき〉　本稿は赤谷氏が、昭和十九年六月より二十一年六月にいたる「中国での軍隊生活（実は病院生活）の日記とメモ」を、氏のめいに当る堀直子氏のため一冊のノートに写されたもの。わたし、原田憲雄が編集中の『幻の葡萄』の参考になろうと、堀氏に贈る前に見ることを許された。読んでみて、『幻の葡萄』の参考にするだけでは惜しいので、氏に願って本誌に連載することにした。できるだけ原形を尊重するが、紙面と保有する活字の都合で、一部を変更し、あるいは省略するところもあろうことを予めお断りしておく。変更・省略のところは注記するつもりである。（一九八二年四月十八日）

わたしの兵隊手帳

手帳は二冊ある。一冊はNo.5、昭和十九年六月より十月頃までの記。他はNo.6、十九年十月より二十一年六月のもの。中国での軍隊生活（実は病院生活）の日記とメモである。

転記するについて、次のような方法をとった。（1）インク書きは手帳の原文　（2）鉛筆書きは今の追記。

（3）原文はそのままを原則とするが、旧漢字は常用漢字に改めた。但し不徹底。噌噌の如き著しい誤りは味噌と改めた。（4）鉛筆での右傍書はルビや訂正、（　）内は参考。左傍書は注記。（5）文中の（鉛筆）は補字、（ペン）は省くべき文字。

〈編集者注〉　右凡例の（2）、（4）、（5）は、本誌ではすべて〈　〉で囲んで本文と区別する。

（整理番号5）手帳

19・3・12　中部第23部隊へ入衛　6・4　臨時召集。23部隊へ　6・10　大阪出発　6・18　南京着　6・26　南京発　6・30　漢口着　7・9　漢口発　7・11　岳州着　7・13　受診　7・14　岳州野戦病院入院　7・28　武昌陸軍病院転送　8・30　武昌発　9・5　南京第一陸軍病院入院　9・11　南京発　9・14　国境通過　9・15　奉天陸軍病院入院　9・26　遼陽陸病へ転送　11・23　奉天陸病北陸第二病棟へ転送　12・3　奉天発　12・4　国境通過　12・5　天津陸病入院

20・1・6　天津発　1・8　徐州陸病収容　1・10　退院、徐州発　1・11　南京着　2・1　南京発　2・11　九江着　3・8　九江発　3・19　武昌着　4・20　第一五九兵站病院入院　5・24　漢口第二陸病二分ニ転　7・18　退院　江夏部隊入隊　8・2　第三十四軍野戦貨物廠武昌支廠衛生材料課配属勤務　8・31　第一五九兵站病院分院ニ入院　9・7　第一五八兵站病院へ転送（江漢病棟）　10・4　病名脚気決定　12・16　肺結核ニ転症

21・2・12　伝〈染〉病棟へ転室

〈この表は次の営内靴の次に貼付し、赤インクで記している。いつ整理してはりつけたかは不明。

○銃番号　七七九四八番　帯剣　七八八二九番　被甲〈防毒マスク〉　六一二九九番

○不寝番特別守則　火災盗難衛生予防、灯火管制及ビ警報ニ注意シ、変ツタコトアラバ班長ニ報告スベシ

営内靴　左二ノ四　クマキ　下ヨリ　〈意味不詳〉
　　右二ノ三　タマオキ　右ヨリ

〈以上は三月の教育召集入営時のものらしく、以下は六月の臨時召集以後のもの〉

宇智郡宇智村字三在　林良作

吉野郡野迫川村弓手原　中上弘

○奈良県北葛城郡当麻村大字当麻　乾楢治〈同時に臨時召集を受けた上等兵。同じ小隊に属す。

五条三六二番　赤谷　〈叔父赤谷長司の電話番号

一七、〈円〉八四銭　六月八日現在　〈六月八日は大阪津村別院で待機中

三〇〇三一四五番　帯剣番号　〈帯剣以外の兵器は受領せず。

○子あり母を憶ふ　母あり子を憶ぶ　子召されて兵となり　将に戦地に征かんとして　大寺〈西本願寺津村別院〉に屯〈たむろ〉す　母、子に会はんと遠きより来る　されど歩哨〈ほしょう〉は門を閉〈とざ〉し　塀の高きを恨む　門前に機を待つこと数夜　〈未完のまま。面会は許されず。また門まで来たものは情報に明るかつた者。〉

○六十八師団、独立歩兵第六十二大隊、檜二三三〇部隊　〈自分の所属する補充隊と思うが、追及すべき本隊か

もしれない。〉

○しみしみになきゐしせみの声たえてうの、峠に鶯のなく　〈旧作を思ひ出して記くたか？〉

兵庫県武庫郡甲東村仁川上ケ原　中尾道夫　〈中尾氏の筆跡、彼についての記憶なし。〉

○奈良県生駒郡富尾村二名　植松秀茂　〈中尾・植松両氏の住所は手帳6にも記す。満州での知友か、〉

大阪府布施市御廚九十五番地

○西宮市中前田町四四

○　題壁　釈清狂

男児立志出郷関　学若不成死不還　埋骨豈唯墳墓地　人間到処有青山

人口にかいしゃへ※原漢字・月十会、月十火※よく話題になる〉せるため兎角風馬牛然へふうばぎゅうぜん・ぼんやり〉と無関心の裡へうち〉に聴き過し来れど、味ふに滋味迅くるなし。

○〈次に「荒城の月」の歌詞。略す〉

○〈次、新潟たわら※原漢字・人十表※、雪菓子（？）、パンの製法を記す、今略す。〉

○六月十八日　晴　南京着　〈イギリスの缶詰工場だったという兵站（へいたん）に入った。そこに一週間余りいた時の記。〉

初めて見る支那国民の生活振りに珍希の観へ感〉を懐く。その中特に物資の豊富（その価格如何は別として）は羨しく、彼等の表情・行動に何等敗戦国民らしきもの見えず、悠々と生活を楽しめるが如き様は「これでは戦争にはならないし、どちらが敗けてゐるのか判らない」と云つた感が深い。神経の太さ、これはもつと学ばなくてはいけない。日本人は何事にも神経質すぎる。

○六月二十日　晴

午後、軍装にて南京城外東方一里の丘陵地帯に行き軽い演習を行ふ。途中支那人街を通る。「道路」土質泥土質のためホコリポク舗装路の石は甚だ硬く、且つおうとつ※原漢字、デコボコの意※をなして歩きにくし。「家屋」煉瓦を組み、屋根を藁或は瓦にて葺く。「民俗」家屋の入口に聯へれん・左右対になった書きものゝを貼へはゝる。文字記憶せず。辻堂の如き廟あり。破風へはふゝの下に紋へ文ゝ様を描ける外へほかゝは、形民家に同じ。墓地、土饅頭にしてその上にスリ鉢形の土塊二こ※竹十固※を重ねたるものをのせたり。時に棺露出しあり。住民のよく門口に立ちて食事するを見かけへるゝ、屋外に食卓をす※原漢字、手十居※ゑて一家へ族ゝそれを囲めるは一般的な風俗と見られたり。「風物」野生ニンジンとも言ふべき白き花。あざみはすでにほほけてゐたり。草原は雑草高し。墓地の撫子へなでしこゝ。「食物」極めて豊富。唐辛子。キウリ。白ウリ（内地のとは少し変へかわゝれり）。熟梅。桃。キャベツ。鮒。鶏。肉。「ドラヤキ」各種菓子。飲物。「トコロテン様の豆腐」。腐卵へピータンゝ。三度豆。食器も身体も蠅だらけになりながら物を食つてゐる老翁。茶瓶へちゃびんゝ頭。

○六月二十二日　晴

昨二十一日南京城見学の名の下に朝早く出発（屯営は英国の缶詰工場であつたとか。高広なること城外第一）ゆう※原漢字、手十口十巴※江門より入り、広いアスファルト道に沿つて中山門に向ひ、途中一折して日本人街を過ぎ、南京神社に参拝。軍装は軽装ながら、炎熱の中、休止の殆どない急行軍のためとて、落伍者輩出。中山門を出て左折し、中山陵・明孝陵を望みつつ熱へ孰・いずゝれにも到らず、最も近き某陵所に至りて昼食。既に

十四時。帰途は城門に沿ひ、翠園なる公園地帯を過ぎたが、中国の男女、種々の飲物を並べて遊覧の舟に乗り、広い蓮池を悠然　然へ悠々　々〳〵と遊んでゐる様を見、狭量とは思ひつつ、何のために戦つてやつてゐるのだらうかと云つた感が濃く自分を支配した。指揮者の土地不案内のため、迂路へうろ〳〵をとつて城内に入り、又ゆう江門に至り、帰屯。既に夜であつた。

この日、沿道の商家にならぶ飲物・果物・野菜物を見るたびに、渇した喉へのど〳〵が愈々渇し、店のない処を歩いては故郷の井戸水を想ひ、青梅の酸味にあこがれてゐた。水、水、これほど欲しいものはない。途中、要領を使つて、禁ぜられた支那民家に入り、茶の冷えたのを水筒につめて貰つたが、なかなか一杯や二杯の水筒では足りるものではない。黄塵のもと、黙々と炎暑の中を、水に苦しみつつ進みゆく、かかる労苦は一生の中の忘れられぬ姿へ種〳〵とならう。

今日二十二日、昨日につづいての行軍、兵器受領とはいへ、きょり※原漢字、距離の略字※が遠くて一角へいっかどの行軍になつてしまつた。昨日の疲労が未だ癒らないところへ、昨日への〳〵水がすぎてか胃腸を害し、舌は荒れ、汗は左程へさほど〳〵出ず、便へ通〳〵もなく、ただ腹中のみだぶだぶしてゐる感じ。昨日に勝る難行軍となり、特に帰途などは夢遊病者の如く、ふらふらと眠りながら歩き、昨日の様へよう〳〵に水気のものをしたふ余裕すらなかつた。苦しみの果てとも言ふべきだらうか。この日への〳〵行程四里余。午前中の予定がかへれば十五時であつた。

昨日、今日の行軍で、城内の主要建造物、即ち中央党院・陸海軍部・経〇へ経？理？〳〵本廠・市廠・中央飯店

等を見、戦禍の跡をも見ることが出来たが、一身の事のみが大きくて、それらの印象も余り強くはなかつた。

今日かへつて水で身体を拭いた。家を出た三日の日以来初めての水浴らしいものであつた。絶えず自分の身体を見てゐたが、この際初めて自分の身体の痩せてゐるのに気がついた。船中の給養悪く、当地は更に悪く、痩せるのは当然ながら、今日の行軍の苦しさと憶へ思〉ひあはせ、今までいだいてゐた自信が霧消してしまつた。〈内地在営中の体重は六〇キロだったと記憶する、〉

去る四日、二十三部隊に、自分等へら〉と同じ様に入隊して「ニ」隊に編入なつた者が、途中の海域で空襲され、殆ど死んだようなうはさがまかれてゐる。〈「六月十六日、米空軍北九州に初空襲」と年表にあり。在営中の杉田荘作君からの通報で、この時、私が死亡したことになつてゐたらしい。〉

あはれにも、もの思はす事件が　つ。それは今日の夕方、宇陀正一、あの四班で、あれ程はりきり、今度の召集では見違へる程銷沈してゐたあの宇陀が、飛降自殺を遂げた。理由については何も考へたくない。つつけばいろいろの問題が出てくるだらう。しかし行軍中の苦しみに於て得た心理から推して、その「死への心の動き」は判る。これについては尚向後〈今後〉問題になる点が多からう。〈これから漢口、岳州へと向う、〉

○道の上に続く軍靴の跡すべて南に向くを見つつ我れ来ぬ（7・14）

〈七月十四日、私は反対に南から北へ向って病院へ送られた。発病地は岳州郊外のゴリハイ。頻繁な血便排泄で赤痢の疑いとのこと。〉

○19・7・26　岳州野戦病院にて　〈として、ドイツ語の詩を写している。映画「会議は踊る」の主題歌だった

か。「ボウ　イッヒ　ゲーエ：：」のあれ。略す。〉

○八月二〈？〉日　晴　〈月日、天候は消している。防諜上の注意があったのか。以下同じ。これからの記事は武昌の病院でそれまでのことを想出して書いている。〉

一昨日、十二号六室より四階〈上げられ〈た〉、自分等が最初の住人としてこの屋根裏部屋に陣取つただけだのに、今日まで二日の間に続々と新入者が増え、〈る〉。今日は軍医殿が来られて「退院出来ると思ふ者はゐないか」とて一々顔色を見て廻り、小生の前〈来ては〝どうか〟ときかれる。〝まだ腹が固まりませんし：：〟と言つてことはつたが、此方〈来てから一週間にもならず、やつと昨日薬を貰ひ、食事は軟白・軟菜で、間食・入浴を禁ぜられてゐる患者が退院出来るものかどうか。岳州の方は野戦病院だから、万事行届かないのは無理ないとしても、武昌の病院がかかる事ではたまらない。然しこれもすべては患者が多すぎる結果である。〈大陸打通作戦の最中で、患者の洪水だつたのだろう〉　少々悪い者でも放り出して、更に悪い患者を収容しなくては。病当局者の側から言へば多分かうなのだらう。だから病院と言つても昔〈平時〉の病院とは大分事情が違ふ。患者がどんどん使役に使はれる。給養は栄養価がどうあらうと問題でない。例へばもう今日まで〈の〉三日間カボチヤの汁ばかりである。栄養がどうな〈ま〉らうと、ただ続々来入する患者に食事をさすと言ふ事が当座の問題であるらしい。だから患者にしてみれば、雨のかからぬところで飯を食はして貰つてゐると言ふ事だけで感謝しなくてはならない訳。又自分にしてもここに何時までも厄介になりたくない。行ける様にさへなれば、軍医殿に催促されなくとも出て行きたい。早く部〈本〉隊を追求〈※及〉しに。然し今の様に体重四五㌔しかなく、少し無

理すれば下痢となり、一寸へちょっと〉した歩行にも疲れる様な調子では、いくら気ばかりあせつても仕方がない。へ四階に移されたのは軽症の扱いだったのだろう。患者の種別に担送・護送・独歩があり、その中の独歩患者かと思われる。

○　へ次に「八月六日晴」として「製飴法」などを記す。いま略。前記の新潟たわら団子の製法もこの頃に属するものか。病人間へかん〉の話はとかく食べ物に偏りがちだつた。

○八月六へ？〉日　晴

病院生活といふと全く暇をもてあます様に想へるが、さて毎日の生活を顧みると案外暇がある様でない。勿論使役などで忙しいと言ふのではない。ただ何もしなくても相当早く日が暮れてしまふ。隣友と無駄話の二、三もし、食事をし、便所へ通ふ。これだけで日が暮れる。外へほか〉にこれといつて何もするところがない。言はば案外退屈のない惰眠生活である。かかる訳で漢口の兵站にゐる頃から記し留めて置きたいと思つてゐたことが今日まで延び々々になり、中には印象がぼやけ記憶の外にはみ出てしまつたものもあるが、心の整理といつた意味から少し記してみよう。

※　へ手帳には○印。いま変更〉支那の寺院と僧侶

支那へ来て街を歩いた事も少く、標記の事情については全く無知に等しい。

先づ寺院であるが、塔が寺院に付属したものとして、今まで見た塔の中で、最も巍然　へぎぜん〉と牢固へろうこ〉につつ立つて見えたのは安慶へあんけい〉の塔である。望見だから正確なことは判らないが、その塔の下

の方には殿舎らしい宏壮へこうそう〉な建物が並んでゐた。他に塔は数箇所で見た。現に武昌にもあるし、岳州でも近くから見た。だが皆荒れてゐるし、塔だけが寺から残された様にしか見えない。寺の名をはつきり見たのは漢口兵站のすぐ傍へかたわら〉にあつた大安精舎へしょうじゃ〉である。然し建物は予想してゐたものとは相違し、何等民家と選ぶところのないへかわらない〉ものであつた。この寺は（地理的関係から）破損した儘へまま〉で住侶へじゅうりょ・住んでいる僧〉はなかつたが、武昌駅の近くで見た寺へに〉は人も住んでゐた。この寺は門が民家らしくなかつたので注意を惹へひ〉いたが、それでも屋外の壁に大きく「南無阿弥陀仏」と書いてなかつたら、てつきり見逃すところであつた。以上の如く、寺を見たいといつても外から望見した程度で、その内部にいたつては全然知らない。然し、何処へ行つても寺が目に立つ内地と比較すれば、外形的ながらも支那仏教の現状は寥々へりょうりょう〉たるものとしか想へない。

次に僧侶であるが、これは僅へわずか〉に二人しか見へてゐ〉ない。一人は南神社へ参拝する途中で見た若い僧へ侶〉で、大阪辺でよく見かけるたい※原漢字※夜坊主といつた感じ。他の一人は漢口市内で逢つた太つちよの老僧。靴へに〉こうもり※原漢字※傘へがさ〉、改良服の様な衣をひつかけ、首に大きい数珠をぶら下げ、その恰好も決して見よいものではなく、内地の遍路まがひの僧に似かよつてをり、威儀厳正を想つて来た先入主へせんにゅうしゅ・先入観念・ここでは予想ぐらいのところ〉は大分へだいぶ〉裏切られてしまつた。

※蠅　漢口宿舎へ兵站宿舎。兵站は軍需物資の補給所。〉便所のうぢ虫：：炊事場の蠅：：金蠅：：電線・電柱・鉄条網・草木に着いた蠅ー支那民族　国民性、戦争の将来へとにかくすごい蠅、平気な中国人。これを相手の戦争ではいつ果てるともと思つていたのだろうか。〉

夜来庵かぜだより　―若い日の森田曠平―　（一）

原田憲雄編

〈編者まえがき〉森田曠平氏を初めて識ったのは一九二四年の四月である。京都府立京都第三中学校（以下、三中とよぶ）の四年生になったわたしは、病気休学して二年おくれた彼と同級同組となった。彼は十九歳、わたしは十六歳だった（いずれも数え年。以下年齢はすべてこれによる）。十代で三歳違うと大人と子供ぐらいに隔った感じのするもので、はじめは敬遠していた。ところが、国語や漢文の授業に、先生の難問に答えるのが彼かわたしであり、読書においてはわたしもいくらかませていたところから、だんだん親しくなり、一九三五年五月、病中の彼を問い、はがきや手紙を交すようになった。以来、今日まで、時によって疎密はあるが文通し、手許の書簡はかなりの数になった。現在の彼は鬱然たる画人で、その業績や思想については大家の評論があまたあり、わたしの語る余地はない。だが、十代の末から三十代の初めにかけての心情はいまの画友や評家にもあまり知られていないのではないか。彼の書簡はそれを知る一つのたよりとなるだろう。とはいえ画人を識るには絵があれば充分、という正統な考えがあり、若書きの手紙はがきは無用の長物かもしれぬ。ただわたしにとっては当時の航跡は消え、この書簡集がのこるだけである。幼い感情旅行をかえりみる一つの有力な航図である。幸いに氏の許しを得たので本誌に連載することとした。「夜来庵」は当時たわむれに書信中に用いた彼の自称のひとつである。借りて題とした。表記は原文を尊重するが保有する活字の都合で便宜に従うこともあろう。あらかじめおこ

とわりしておく。読者にはわかりにくいかと察せられる事柄につき、短いものは〈　〉内に、長いものはその書簡の後に注釈を加えた。誤りなきを保し難い。教正をお願いする。（一九八二年六月一日）

一九三五（昭和十）年五月十一日

住所は、〈京都市〉左京区松ケ崎〈まつがさき〉正田〈しょうでん〉町二〇ノ一。あて先は、市内上京区下長者町〈通〉千本西入ル　原田憲次郎。「憲次郎」は憲雄の改名前の名。消印不明。てがみ。

随分暑くなりましたが　元気で通学してますか？　僕は白堊会や市展の制作でOVER・WORKになり発熱して弱つてゐますが、大したことありませんからもう直に学校へ顔を出すことも出来るでせう。

白堊会　見てくれましたか？　是非感想を聞かせて下さい。毎日新聞の京都版には黒田重太郎先生の批評が出てました。その中の僕に対する批評は　くさしてあるし、又　ほめてもあるし　中々親切な批評だと感激しました。

明日市展へ油絵二点搬入します。両方とも五〇号で　白堊会へ出てゐた一番大きな絵と同じ大きさです。

画題は「娘」と「早春風景」です。僕はどうも「娘」の方が入選するのぢやないかと思ひます。今度は伊谷〈賢蔵〉さんに入選すると折紙をつけてもらつたので甚だ愉快です。バンザイ

通つたら　又見に行つて下さい。招待券がもらへたら送ります。

〈浅沼〉大助〈三中の級友〉も展覧会へ行つたでせうか。「いかんとあかんで」と言つたら　さよか　と言つたので行つたと思ひますが一度聞いてみて下さい。

此の手紙を見たら　今度は君の短歌を送つて下さい。大助は　俺ちつとも分らへんねんと言つたので　分らん奴に送つてもどむならんさかいへどうしようもないから〉僕の方へ廻して下さい。
ハツちやんへ三中のクラス担任だつた清水初太郎先生〉　何か僕のこと聞いてましたか。ボンへ前年の担任西村栄次郎先生〉の時は平気で休めたが　今度は前の様に行かんので難儀です。手紙を出しときました。
そんなら今晩はもうねむいのでこれで止めます。さよなら

昭和拾年五月十一日夜。　Kohei より　原田兄

君の雅号は何と言ひますか？

〈長塚節の〉「土」全部読みました。学校へ行ける様になつたら持つて行きます。

※『森田曠平展』（一九八一年九月、図録）末尾の「年譜」には〈昭和一〇年（1935）一九歳　五月　第一回京都市美術展（京都市主催）洋画部に「洛北風景」が入選。〉とあり、ここの「早春風景」とは合わないが「年譜」のが正式の画題なのであろうか。なお、自選画集『森田曠平』（一九七五年十二月）の「略年譜」に〈昭和八年一九三三　十七歳　友人原田憲雄より……〉とあって、わたしの記憶とくいちがうが、あるいはわたしの誤りであろう。

五　月　十　三　日　付、午後消印。

昨朝、君の手紙を拝見しました。一昨夜、君の方へ手紙を出して、その翌日来たのだから入れ違ひになつた理由

へわけゝ。だからあの手紙は返事ではありません。君の詠んだ数々の歌、興味深く拝見しました。うまいと思つた歌、また、それ程でもないと思つた歌　色々ありましたが、一般に素直に詠んだ歌が好きでした。君の歌を評するのは　門外漢のボクにとつて潜越へママゝかも知れませんが、門外漢なら門外漢なりに又考へもあらうもの、無礼の点は幾重にもあやまります。

あの歌の中には　自分の感じそのまゝ、素直に歌つたものと、机の上で作つた跡がいかにもはつきりと分つてゐるのと二つあります。

前者には「夜深くふみみつへつゝありて云々」で感覚の非凡なかなり深刻な味のするものです。膚の香をほのかに鼻に感じる所　なみなみならぬ心がまへとデリケートさを感じます。

後者は「顔へくずゝれゆく心をうらみ云々」です。この様な意味を歌つた歌は大好きですが、もう一さう洗練されてゐないと思ひます。

一般的に感じた事ですが、上の句はスラスラと進行してゐて非常に気持がいゝのですが、下の句で何となく行きづまつてしぶりがちです。そして随分随所に啄木がありますね。「その昔恋してありし君達は云々」は啄木の臭へにおいゝの随分高いものですが優作だと思ひます。

がしかし、此の中で最も君の特色を表し、最もいゝものだと思ふのに「物売のをみな美しその言も云々」があります。誰にも影響されず素直に歌つてある所好きです。けれどちよつと昌へ晶ゝ子を感じるふしもあります。

「飛び入りて自殺云々」も誰も気付いてゐながら云へないものです。「高からぬ書にしあれど」もよく感じる

気持です。「又本が買ひたくなりて」よりもいゝと思ひます。「今日も会ひし乙女うるはし」も優れてゐると思ひます。

右は　ちよつと僕の感じたまでを書きつけました。憤へおこゝらないで下さい。

君がいゝ歌を送つて来て呉れると　僕も作りたくなります。歌は大すきですが　絵を描へかゝいてゐると作れません。今はもう全然作りません。しかし、これからちよいちよい作りたいと思ひます。左は去年の八月から九月にかけて信州浅間の高原でうすむらさきの浅間の畑をあふぎながら作つたものです。批評して下さい。門外漢としての……。

幾百里　家さかり来て　此の高原の　朝餉へあさげゝの卓に　閑古鳥聞く。

しらかばの　梢を窓に　みるいでゆ　つかりてしまし　昼ふけにける。

追分の　宿のはづれや　はろばろと　浅間へ続く　みちもありたり。

雨の音　枕にしみて　ひとりねの　頬につめたく　小夜ふけにける。（相聞）

まだ　あるにはありますが　恥しいのでやめます。

まだ一三日登校しません。手紙下さい。さよなら　　曠平　　憲次郎兄

五月十五日　午後消印。てがみ。

お手紙ありがたう。

君の歌はあまりにも僕を喜ばして呉れた。そして門外漢たる僕も何となく詠んでみたくなつた。今朝再び君の手紙をみてから左の数首の腰折へこしおれ〳〵をものした。

○夕されば菜の花もゆるあをじろき風の音さへこゝろつくすも。

○麦の芽の二寸のびたる此の頃の畠打つ乙女恋しかりける。

○酒をのみてくもの糸もて作りたる琴かきならす夢みんと思ふ。

松の花二題

○松の花指ふれみればほのぼのと淡き光のもゆるうれしさ。

○松の花た折りて投げし指の色淡くそまりて風にそよげる。

鶏と妻

○ほのあをき光ともれる此の朝げうつらうつらと鶏の鳴く聞く。

○鶏の宵なきするはさびしなと云ひし乙女も母となりにし。

浅間高原回顧

○白樺の梢なつかし閑古鳥あさつゆになく声もなつかし

○浅間嶺へあさまね〳〵に雲とびかへる高原の景色なつかし初夏の頃。

○かにかくに浅間は恋し閑古鳥から松林峡(かひ)のしづけさ。

君の白堊会展評　面白かつた。その鋭さに感心したのもあつたが、矢張りまだ観方が足りないと思ふのもあつた。

女の松村氏のを　君は下手だと言つてゐるが、あの人は　女では黒田孝氏よりもうまい。恐らく　大塚与志（女）氏等等と肩をならべて堂々たるものだ。ことに子供と羽子板を描いたものは　実に敬服した。中西氏の裸女はよくなかつた。自慢する様で悪いが、あの裸女なら僕の裸女の方がいゝと思つたがどう？　大塚氏の　本を読んでゐる絵を　君はほめてゐたが　同感だ。あの絵はたしかにうまい。大塚さんのもので一番よかつたらう。

黒田孝子さんは黒田重太郎先生の親類の奥さんだ。三〇位の人。女らしい所があつていゝ絵だつた。

先生の絵もどうかと思ふのもあつたが、流石へさすがゝに親玉の貫録へママゝを示してゐた。

伊谷氏や岩崎　伊庭氏等の絵はどう感じた。

こんど市展を注意してみてみたまへ。僕も出るかもわからない。　曠平　原田君

九　月　三　十　日　付、午後消印。てがみ。封筒の名あて「原田憲次郎大人」

親切なお手紙ありがたう。

一度君には出さねばならぬと思ひながらゐたのだが　たうたう今日になつてしまつた。字は最近少しも書かないのでさだめし読みにくいだらうと思ふ。

七月に君が訪問して呉れたのを　九月に入つてからやつと知らしてもらうへママゝ程の状態で　へ病気はゝ相当激しいものだつた。現在では朝飯の前に約一丁程歩くことにしてゐる。

あまり休んでゐては今度はあの赤い服を着ねばならない様になるから・・・

十月の十日頃から出席してみようと思つてゐる。さうすれば大体卒業出来る見こみです。実際　現在では頭を使ふことが一番の苦痛で、ちよつとした計算も出来ない。

ゴリキーの思ひ出の記は長い間かゝつて読んだが　随分い、文だと思つた。その他はまだ読んでゐない。

此の手紙を書き続けるのが苦痛になつた。

君の厚情に対してもつと書ねばならぬ筈だがあしからず、

九月三十日　　曠平（現在病床に横臥せり。君許せ我が乱筆乱文を）　　原田兄

※「赤い服」とはうぐいす茶色の制服をさす。三中では、わたしたちの年度までの生徒は、冬は黒、夏は霜降りだったが、次の年度からの生徒は、いわゆる戦時下の措置として夏冬ともうぐいす茶色の制服となった。病休が多くなると卒業できず……という意味である。この年もらった手紙はこの三通だ。

高橋徹『陶淵明ノート―帰去来の思想―』著者に　　原田憲雄

十一月二日、国文社を通じ恵投のご高著『陶淵明ノート』をいただきました。七日までに二回拝見しました。前にいただいた〈慷慨詩について〉のコピーではわたしに不透明であった問題も、〈「桃花源」とはなにか〉、〈「帰去来」とはなにか〉を読んでいるうちにはっきりしてきました。

すべてが理解できたとはいえませんし、部分的には疑問を感じる点もないではありません（例えば一四〇頁の

「〈謝〉霊運にはすでに自然しか残されていない」）が、これまでにわたしの読みえた陶淵明論のいずれよりも共感すること多く、わたしの未知の視野を示されたものとして敬意を表したいと思います。

わたしが下手な言葉をつづるよりも的確に、あなたの「あとがき」がこの本の主題を語っています。だから、この本を読みながら赤鉛筆でしるしした幾つかを書き写して感謝にかえたいと思います。偶然ながら、後半はいずれも車中で読んだので、しるしが残っていませんが。

およそ礼儀に明るい人間は必ず人の心を知らない。（一〇頁）

中原の故地の喪失がなければ、みずからのフォクロアに対して自覚的に思惟する契機はつかみ難かったにちがいない。（二七頁）

仮構が力をもつのは、現実的基礎に対する緊張のありようにおいてであり、現実を描写することにおいてではない。（二八）

挫折も屈曲もなく肥大する夢想というものを、私たちは考えうるであろうか。（三〇）

ここで次第に判明してくることは、「桃花源」の夢想がユートピアと背反するという点である。（三三）

古代中国の都市国家は　むしろ父権のシンボルであり、都市が成立するために収奪される後背地として存在せずにはすまない農村社会こそ、母胎でなければならない。「桃花源」は当然母胎回帰の願望である。（三四）

牧歌は遠くなった。（三八）

私の「桃花源」が政治的有効性に対して深い断念を経たところに浮上してきている以上、農本主義にどんなに傾斜してもたかがしれている。（三九）

武断がなければ抒情の質は高揚せず、猛志を抱かなければ隠逸の生活をおくる姿が真にならない。（四四）

〈四七頁に、原文の「屋舎儼然」を「家々はいかめしく建ち」と訳しておられますが、「儼然」は「いかめしく」ではなく「きらきらとかがやくように」だろうと思います。厳粧が、いかめしい化粧でなく、目もさめるようなこってりした化粧であるように〉

作品の構成そのものが寓意であることが重要なのである。（五五）

相対性の中で、たれが帝位についても結局大差はないのだ。ただ彼の関心を示すのは、どんな生活状態が人間にとって基本的な姿なのか、という問題であった。（六二）

〈保田〉与重郎の“恵まれた”郷土感覚は、はじめから離反すべき対象としての故郷をもたなかったことを語っている。（七一）

下降しても、生きるほどのことは可能である、といった自信が彼に生まれてあった。（七八）

個的な観念を支えるものこそ、生を味わう深さからやってくる、人性の自然に根をもつものである。（八三）

私たちの屈折した意識は、「中華」を相対化できたときにはいくぶん変わりうるはずではないか。（八六）

淵明の詩句は、隠逸が時代精神の様式と堕したなかにあって、反時代的で古代的な人性における自然と、時代の趨勢との間に、はげしい緊張をうみだしながら存在しているのである。（九二）

文を作る者の観念の質とその水準のみが、記述を本質的にするのである。（一一五）

淵明の見る風景は心情と対立してまでも詩の中に登場することはない。（一四〇）

自然史的人間として第一次的自然と同化するのは、これからやってくる「死」のみである。それを意識することでこそ、自己との対話がこの世界全体、いや宇宙を相手どることになるのだ。（一五八）

憤怒や断念をのみこんだ静ひつへ原漢字〉さ、それを内面化する勁さが彼に固有の表情である。（一六二）

すでに長くなりすぎました。読み返すと、わたしの、あなたに読むものはただ一つのようであり、その一つとは一六二頁から引いた「固有の表情」だったように感ぜられます。二三七頁にあなたの引かれた佐藤正英氏の「みずからが不徹底な隠遁者であるという意識」がこの本の「勁さ」を生んだものと察せられます。

ご本にはさまれたお手紙で伺うと、ご病中のおん由、どうかくれぐれもご保養の上、さらにこの主題を進めていただきたく念願いたします。

（一九八一・一一・八）

観経中国制作説につき牧田諦亮氏に

原田憲雄

拝啓　ご清健のおんことと拝察いたします。さて、突然でまことに失礼とは存じますが、ご論講「善導大師と中国浄土教」を拝読、ご教示を得たく、拙簡を謹上いたします。

ご論講中、観無量寿経につき、へ「これは中国で作られた経典だ」と打ち出したものはまだない訳です〉（『究究紀要』11　二〇頁）とございますが、一九五一年、当時の竜谷大学教授月輪賢隆師が、同大学教授会に提出、審査を通過し、十一月二十日付で学位を授与された「仏典の始終」なる論文は、観無量寿経など観字のつく六経が、インド語原典から翻訳したものでなく、中国で仏教徒が道教との伝道戦に対抗するため創作したものだ、と論証したものだった、と記憶いたします。そうして、同年十二月三日の『都新聞』に報道されています。もしわたしの記憶があやまっていないならば、すでに三十年まえに、観無量寿経が中国で作られた経典だ、と打ち出したものがあったことになるかと存じますが、あるいは月輪教授の学位論文は貴説にいわれるへ打ち出したもの〉には相当らないのでございましょうか。

右は貴論の大綱とはかかわらぬ些事か、とも存じますが、疑問を解きたく、高教をお願いいたす次第でございます。

（一九八一・六・四）

※この手紙は、『研究紀要』の発行者・京都女子大学仏教文化研究所気付で出した。研究所からわざわざ牧田氏あて転送すると電話で通知されたから氏にはとどいたものと察するが、今日まで示教を得ていない。

手紙を出したのち思いついて中村元・早島鏡生・紀野一義訳注『浄土三部経』下（岩波文庫・昭和三九年）をみたら、次のようにいう。

なお、月輪賢隆（つきのわけんりゅう）博士は『観無量寿経』の翻訳に疑いをもち、それのシナ撰述説を主張した。本経も含め『観仏三昧経』などの六観経は、五世紀前半に禅観の実践に要求されて、道教への対抗上、

製作されたという（「仏典の終始」、文学哲学史学会連合研究論文集四、九〇―九一頁）。わたしの文中「仏典の始終」というのは記憶の誤りかもしれぬ。『都新聞』は地方紙だから見ていなくてもあたりまえだが中村氏等の本は普及するもの、であろう。牧田氏はこれをも参照する労をおしんであの大胆な発言をされたのだろうか。

（一九八二・六・三）

わたしのお母さん

原田道子

わたしのお母さんは、学校の先生です。いつも朝、六時半ごろ、起きてきます。着がえたらすぐ、ご飯の用意をします。たまに寝坊した時は、大急ぎで用意しますが、たいていは、ゆっくり用意をしています。パンを焼く時はコーヒーを飲んでいます。でも、朝食は、コーヒーと、パンのみみぐらいしか、食べて行きません。それは、昼食を食べられないからだそうです。でも、給食のパンや、ミルクや、みかんなどを、必ず持って帰ります。勤め先から帰るのは、たいてい五時半ごろです。

帰ったらすぐ、夕食の用意をします。でも、ご飯をたくのは、わたしの役目です。お母さんは、野菜いためがすきなので、よく夕食に、野菜いためが出ます。そのせいか、わたしは、野菜いためがすきです。

お母さんは、コンソメスープやコーンスープはすきなのですが、ポタージュスープや、オートミールなどのとろりとしたものがきらいです。それから、プリンもきらいです。だから、家では、あまりプリンをつくりません。

そして、買うデザートも、だいたいは、ゼリーか、ヨーグルトです。

うちのお母さんは、かたがこると、おく歯がいたくなって、次に頭がいたくなるのだそうです。

お母さんは、わたしにまんざいを見るな、とよく言いますが、たまにわたしにつられて見ている時など、わたしといっしょに大声で大口を開けてわらっています。でも、よくと中で、もうねなさい、もうねなさいと言いますが、わたしがふとんに入っても、お母さんが見ているテレビの音がよく聞こえます。

お母さんは、わたしがふとんにもぐってから、三十分ほどすると、わたしの部屋へ、見に来ます。そして、ふとんをかけなおしたり、電気を消して、出ていきます。

朝、前の日に学校であったことなどを、わたしに聞かせながら、朝ごはんの用意をしたりしています。学校のことを、話している時、とっても楽しそうです。きっと、学校がすきなのでしょう。だから、「学校をやめようかなあ。」と、いってもやめられません。

だから、こんどお母さんが、

「やめようかなあ。」

と、言ったら、わたしは、

「行きたかったら、すきなだけ行っていいよ。」

と、言うつもりです。

（一九八二・三月）